

「地上に火を投げ込む」

ルカの福音書 12:49～53

はじめに

クリスチャン人口の少ないこの日本において、イエシュアを信じること、信者となることに一つの恐れがあります。それは家族から、周囲の人間関係から、社会から反対される、仲間はずれにされることへの恐れです。今日の箇所はクリスチャンになると、教会に通うとそういう目にあうから覚悟しなさい、迫害に負けないように、熱心になりなさいというようなメッセージとしてよく用いられています。しかしそれでは、そのようなメッセージでは神のご計画の完成、「神の国、御国」は見えてきませんし、そもそもそれは良い知らせ、福音とはなりません。今日、私はこの箇所から福音を語ります。どのようにして主は御国をお建てになるのか、すなわち御国に生きる民を起こされ、また集められるのかという、イエシュアが弟子たちに伝えた「御国の福音」を語ります。しかし祈ります、どうか「真理の御霊」が今日一人ひとりに語ってくださいますようにと。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り、これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます。

1. 地上に火を投げ込む

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:49 わたしは、地上に火を投げ込むために来ました。火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。

今日の箇所は「わたしは、地上に火を投げ込むために来ました」というイエシュアの発言から始まっています。イエシュアは終わりの日、反キリストと偽預言者どものを火の池「火に投げ込む」御方ですが、ここでは「火を投げ込む」となっていますので混同しないようにお願いします。いずれにせよ一見、過激というか火撃？な印象を受けますが、ここに使われている「投げ込む」という意味のヘブル語シャールハ(נלח)は本来、「手を伸ばす」という意味で以下のような箇所が使われました。

創世記【新改訳 2017】

3:22 神である主はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」

これはエデンの園において罪を犯した人（アダムとエバ）について主が語られたものです。ここでは否定の意味で使われていますが、本来シャーラハとは「人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きること」を指し示す言葉であるといえます。

また「火」を意味するエーシュ(עֵשֶׂת)は本来、主がイスラエルの父祖アブラハムと契約を結ぶ際に現れた「燃えるたいまつ」を指す言葉です。聖書で最初に使われた「火」エーシュによって主はアブラハムとその子孫、イスラエルの民にこのように約束されました。

創世記【新改訳 2017】

15:17 日が沈んで暗くなったとき、見よ、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、切り裂かれた物の間を通り過ぎた。

15:18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。エジプトの川から、あの大河ユーフラテス川まで…。

これらの言葉の意味を統合するとこの「わたしは、地上に火を投げ込むために来ました」とは、イエシュアが「イスラエルの民に約束の地を与え、地上に永遠のいのちをもたらす」という意味であると解釈できます。未だ地上に永遠のいのちを持った人は存在しません。またイスラエルの民が上記の「エジプトの川から、あの大河ユーフラテス川まで」の全域を所有したこともありません。この二つの出来事は密接に結びついており、これらはイエシュアによって同時に起こることが指し示されているのです。

ちなみにアブラハムの系図の七代前にエベル(עֵבֶר)、そして八代前にセラフ(שֵׂרָפ)という親子がおり、息子エベルはヘブル人(עִבְרִי)の語源と同じで、そして父セラフはこの「手を伸ばして…永遠に生きる」という意味のシャーラハと同じ綴りの名であることから、ヘブル人とも呼ばれるイスラエルと、永遠のいのちがやはり結びついていることが指し示されています。

そしてイエシュアはこの「火がすでに燃えていたら」と願っておられます。イエシュアの願いは父なる神、主の願いです。そしてそれは必ずなるのです。その証拠として今日もなお続く数々の迫害にもめげずイスラエルの民、ユダヤ人は今も滅びることなく存在し続けています。それはたとえ国土を失い、世界中に散らされても、この民が地上から消え去ることはありませんでした。ここにある「燃える」という意味のバーアル(בָּאֵר)の初出箇所を見てください。

出エジプト記【新改訳 2017】

3:1 モーセは、ミディアン人の祭司、しゅうとイテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の奥まで導いて、神の山ホレブにやって来た。

3:2 すると主の使いが、柴の茂みのただ中の、燃える炎の中で彼に現れた。彼が見ると、なんと、燃えているのに柴は燃え尽きていなかった。

3:3 モーセは思った。「近寄って、この大いなる光景を見よう。なぜ柴が燃え尽きないのだろう。」

モーセが見た決して燃え尽きることのない柴の炎、それはアブラハムと交わされた主の契約により、決して燃え尽きることのない、滅びることのないイスラエルの民を指してイエシュアはこのようなたとえをもって語られたのです。

2. イエシュアのバプテスマ

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:50 わたしには受けるべきバプテスマがあります。それが成し遂げられるまで、わたしはどれほど苦しむことでしょう。

イスラエルの民に約束の地を与え、この地に永遠のいのちをもたらすために、イエシュアには「受けるべきバプテスマがあります。」と言われました。しかしそれは私たち教会が行っている洗礼式でも、ヨハネが授けたバプテスマのようなものでもありません。イエシュアの受けるべきバプテスマとは、バプテスマ本来の意味に則したものです。これはヘブル語でターヴァル(טַבַּוּל)といい、その本来の意味は、水ではなく「血に浸す」という意味の言葉です。

創世記【新改訳 2017】

37:31 彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎを屠って、長服をその血に浸した。

ターヴァル「血に浸した」身体ではなく、ヨセフの「長服」、これがバプテスマ、洗礼の持つ本来の意味です。それはイエシュアの十字架の死を指し示すものでもありません。なぜならイエシュアは着物をいっさい身にまとい、素っ裸で十字架にかかられたからです（ヨハネ 19:23）。ですからイエシュアとこの血に染まった衣、この二つを結ぶ出来事はこれしかありません。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:14 天の軍勢は白くきよい垂麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

19:16 その衣と、もものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

これはイエシュアが地上再臨される時の預言です。このようにイエシュアは「戦いをされる」ために下って来られ、その敵の「血に染まった衣」こそがイエシュアの受けるべきバプテスマ、いやターヴァルなのです。このようにしてイエシュアはその時地上を支配している獣と呼ばれる反キリストとその軍勢を打ち

滅ぼし、窮地に立たされていたイスラエルの残りの者たちを救い出されます。ちなみに、この時イエシュアにつき従う「**天の軍勢**」は、携拳とも呼ばれる I テサロニケ 4:16~17 の預言の成就により、天に引き上げられた私たち教会の復活した姿です。先に述べたシャーラハの本来の意味である、地上にもたらされる永遠のいのちとは、朽ちない身体によみがえらせ、イエシュアとともに地上に帰って来る私たち教会を指しているのです。これが「**わたしは、地上に火を投げ込むために来ました**」というイエシュアのたとえに秘められた神の国の奥義、必ず成就する神のご計画です。

3. 分裂

そして「**それが成し遂げられるまで、わたしはどれほど苦しむことでしょう**」とイエシュアは言っておられます。これはただ単にイエシュアが苦しむ、労苦するという意味ではありません。ここに使われている「苦しむ」という意味のツァーラル(צָרַר)の初出箇所にあるその本来の意味を見てください。

創世記【新改訳 2017】

32:7 ヤコブは非常に恐れ、**不安になった**。それで彼は、一緒にいる人々や、羊や牛やらくだを二つの宿営に分けた。

32:9 ヤコブは言った。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神よ。私に『あなたの地、あなたの生まれた地に帰れ。わたしはあなたを幸せにする』と言われた主よ。

32:11 どうか、私の兄エサウの手から私を救い出してください。兄が来て、私を、また子どもたちとともにその母親たちまでも打ちはしないかと、私は恐れています。

32:12 あなたは、かつて言われました。『わたしは必ずあなたを幸せにし、あなたの子孫を、多くて数えきれない海の砂のようにする』と。」

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルが、兄エサウのもとに帰る時のものです。かつて兄を欺いて恨みを買っていることをヤコブは非常に恐れ、彼は「**不安になった**」とあり、ここに聖書で最初のツァーラルがあります。そしてヤコブはその不安によって「**一緒にいる人々や、羊や牛やらくだを二つの宿営に分けた**」とあります。このように、ツァーラルとは本来、自分とともに行くものを「二つに分ける」という事実を指し示す言葉であることがわかります。つまり、「**それが成し遂げられるまで、わたしはどれほど苦しむことでしょう**」とは、イエシュアが「**王の王、主の主**」として地上再臨されるまでに、ご自分の選びの民、救う民を二つに分けるという事実が、そのようなご計画が指し示されているのです。それは述べたように、先に携拳される私たち教会と、地上の大患難を生き残るイスラエルの残りの者です。この二つの存在をもってイエシュアは「**地上に火を投げ込む**」という「**受けるべきバプテスマ**」すなわち先ほどのヨハネの黙示録 19:11~16 に記されたイエシュアの地上再臨の預言は「**成し遂げられる**」のです。このツァーラルに指し示された、民を「二つに分ける」という神のご計画を強調するかのよう、イエシュアはさらにたとえをもって語られています。

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:51 あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思っていますか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ分裂です。

12:52 今から後、一つの家の中で五人が二つに分かれ、三人が二人に、二人が三人に対立するようになります。

12:53 父は息子に、息子は父に対立し、母は娘に、娘は母に対立し、姑は嫁に、嫁は姑に対立して分かれるようになります。」

ここに使われている「分裂、分かれ」という意味のヘブル語はハーラク(פֶּלַח)といます。その初出を見てください。

創世記【新改訳 2017】

14:14 アブラムは、自分の親類の者が捕虜になったことを聞き、彼の家で生まれて訓練された者三百十八人を引き連れて、ダンまで追跡した。

14:15 夜、アブラムとそのしもべたちは分かれて彼らを攻め、彼らを打ち破り、ダマスコの北にあるホバまで追跡した。

14:16 そして、アブラムはすべての財産を取り戻し、親類の口とその財産、それに女たちやほかの人々も取り戻した。

ハーラク「分かれて…攻め、…打ち破り」このようにして「アブラムはすべての財産を取り戻し」ました。このように、主はご自分の選びの民を一旦ハーラク、分けて、そうして戦いによってすべてを取り戻そう、回復させようとしておられることが指し示された言葉、それが「分裂、分かれ」と訳されたハーラクに秘められた神のご計画です。ちなみにここに「五人が二つに分かれ」というたとえがありますが、なぜ五人、五という数が使われているのかというと、この数が聖書で最初に使われた創世記 1:23、天地創造の「第五日」は、空の鳥と海の魚が創造された日です。鳥は天の大空に、それは携挙される教会を指し示し、そして魚は「海の巨獣」それは「海から上がって来る一頭の獣（黙示録 13:1）」すなわち反キリストがいる大患難に巻き込まれるイスラエルを指しています。

創世記【新改訳 2017】

1:20 神は仰せられた。「水には生き物が群がれ。鳥は地の上、天の大空を飛べ。」

1:21 神は、海の巨獣と、水に群がりうごめくすべての生き物を種類ごとに、また翼のあるすべての鳥を種類ごとに創造された。神はそれを良しと見られた。

1:22 神はそれらを祝福して、「生めよ。増えよ。海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ」と仰せられた。

1:23 夕があり、朝があった。第五日。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

13:1 また私は、海から一頭の獣が上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。その角には十の王冠があり、その頭には神を冒す様々な名があった。

このように「五」という数そのものにも、終わりの日に起こるイスラエルと教会についての神のご計画が指し示されているのです。

また「父と息子、母と娘、姑と嫁」というこれらのたとえは、他のイエシュアのたとえで言い換えるならばそれは「先の者と後の者」と言うことができ、これもまたイスラエルと教会を指しているのです。これら後の者が先に、先の者が後になり（マタイ 20:16）、教会もイスラエルも救われます。これがこの「**分裂**」させることこそがイエシュアが「**地上に平和をもたらすために**」なされる神のご計画なのです。

このように、イエシュアのこの「分裂のたとえ」は、信仰を持った人が家族の反対にあうというような些細な出来事を指し示すものではありません。もしそうだとすると、それがどうして福音となりうるのでしょうか。主は私たちを救う御方なのです。互いに争わせ、互いに戦わせる御方ではありません。ここにはイエシュアが終わりの日にイスラエルと教会をどのようにして救われるのかというご計画が指し示されているのです。ハーラクとは、本来一つの軍勢が同じ目的を目指すも、一旦二手に分かれて、やがて再び合流し一つになるという意味の言葉であり、決して敵対を意味する言葉ではないのです。

4. 身を隠す

最後にもう一度、ハーラク「分裂、分かれる」の初出箇所である創世記 14:15 を見てください。

創世記【新改訳 2017】

14:14 アブラムは、自分の親類の者が捕虜になったことを聞き、彼の家で生まれて訓練された者三百十八人を引き連れて、ダンまで追跡した。

14:15 夜、アブラムとそのしもべたちは**分かれて**彼らを攻め、彼らを打ち破り、ダマスコの北にある**ホバ**まで追跡した。

14:16 そして、アブラムはすべての財産を取り戻し、親類の口とその財産、それに女たちやほかの人々も取り戻した。

「**分かれて**」進軍したアブラムとそのしもべたちは「**ホバ(הַבָּּ)**」という地まで行き、そこで合流したことがわかります。この地名は「隠れる場所、隠れ家」という意味で「身を隠す、隠れる」という意味のハーヴァー(הַבָּּ)または(אֲבָּ)がその語源です。このハーヴァーは本来、「人が木の中、間に**隠れる**」という意味の言葉です。

創世記【新改訳 2017】

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは、神である主が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて、園の木の間に**身を隠した**。

3:9 神である主は、人に呼びかけ、彼に言われた。「あなたはどこにいるのか。」

3:10 彼は言った。「私は、あなたの足音を園の中で聞いたので、自分が裸であることを恐れて、身を隠しています。」

この出来事もまた人がエデンの園で罪を犯したために起こったものですが、すべては神の書かれたシナリオです。それを証拠にここにも神のご計画の「型」が表され、その完成がまさに隠されています。すなわちそれは、主の「そよ風」、聖霊を吹きかけられた、受けた者はみな、主の「音」御声を聞き、イエシュアという「木の間に」イエシュアの中にハーヴァー「身を隠し」かくまわれ、神の怒り、滅びを免れる、というものです。事実、この時アダムとエバは死ぬことがなかったように、私たち教会も「キリストを着る（ガラテヤ3:27）」とあるようにイエシュアの中に受け入れられるようにして信仰を持ち、救いの約束を得たのです。そしてそれはいよいよ携拳の日すなわち復活の日に成就します。一方ユダヤ人は、イスラエルの残りの者と呼ばれる彼らは「その日」すなわち終わりの日、主の「恵みと嘆願の霊（ゼカリヤ 12:10）」を注がれ、かつて自分たちが突き刺した御方、十字架のイエシュアをメシアとして受け入れ、主に立ち返ります。そして地上再臨されるイエシュアがお建てになる「神の国」メシア王国とも千年王国とも呼ばれる御国の中に、私たちとともに迎え入れられ、かくまわれ、救いを得る、すなわち滅びを免れ、いのちを得るのです。この事実が、神のご計画が、アブラハムとそのしもべたちが追跡した、追いかけて、追い求めた先の「ホバ」という地名には、奥義として秘められ、隠されているのです。

このように、主はご自分の選びの民、御国の民をイスラエルと教会、二つの存在、二つの道すなわち終わりの日の天「携拳」と地「大患難」に分け、御子イエシュアによってやがてこれを一つに結ぶ、まさに天と地をつなぐという形で御国を、御国の民を起こされるのです。（この事実について特に使徒パウロがローマ人への手紙 11 章において「イスラエルと異邦人（教会）」という形で強調して記していますのでぜひ読んでみてください。）

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:2 『父よ、御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。』

11:3 私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください。

11:4 私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。私たちを試みにあわせないでください。』